

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：32668

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20330177

研究課題名（和文） 手話・舞踊・演劇の言語性・非言語性と共感の相互関係を利用した異文化理解教育

研究課題名（英文） Intercultural education using the relationship between human empathy and linguistic/non-linguistic aspects in sign language, dance and play.

## 研究代表者

齊藤 くるみ (Saito, Kurumi)

日本社会事業大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：30225700

研究成果の概要（和文）：手話・演劇・舞踊という身体表現と、言語的・非言語的コミュニケーションの関係を探り、それらを視覚的に認知することにより、共感性等が養われることを証明した。そして演劇の手法等を利用したアクティビティーの効果を測りながら、身体表現・非言語的身体表現を利用した他言語・異文化理解のための教育プログラムを開発し、その効果を検証した。

研究成果の概要（英文）：Through physical activities such as sign language, dance and drama, we studied the relationship between physical expressions and linguistic and/or non-linguistic communication. We proved visual cognition of physical activities effected on empathy and we developed educational programs using physical activities which are effective for intercultural understanding.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2009年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2010年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2011年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
総計	11,600,000	3,480,000	15,080,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：多文化教育、共感、手話、舞踊、演劇

## 1. 研究開始当初の背景

代表者齊藤は手話という身体表現を手段とする言語の研究に取り組んできた。ろう者の認知構造を利用した英語教育教材の開

発も行った（基盤研究(C)(2)平成15～16年度）。本研究に着手した当初(2008年)聴覚障害者の視覚認知能力と視覚障害者の聴覚認知能力を利用したバリアフリー英語教育教材の開発（萌芽研究平成18～20年度）を行

っていた。その中で、障害を文化としてアイデンティティーを確立するろう者の存在、手や表情・視線などを言語記号とする日本手話を母語とする少数言語話者としてのろう者の存在に注目した。本研究では、身体表現を使った参加型学習として演劇的手法の獲得型教育の研究に取り組んできた渡部淳と、ダンスセラピーを通して舞踊という身体表現と共感の関係を追及してきた八木ありさの協力を得て、手話・演劇・舞踊（表現）の接点である言語的・非言語的身体表現と視覚モーダリティを介した教育について研究することにした。そして身体的表現と視覚認知の相互作用による学習が他言語理解、他文化の理解と自己理解になるということ、認知心理学を専門とする槻館尚武が検証することになった。この研究を通して、異文化を理解する教育のひとつの手法として確立させ、障害者を含む多様な学習者の相互理解教育に貢献することを目指すことにした。

## 2. 研究の目的

手話・演劇・舞踊という身体表現と、言語的・非言語的コミュニケーションの関係を探り、それらを視覚的に認知することにより、共感性等が養われることを証明し、言語的身体表現・非言語的身体表現を利用した他言語・異文化理解のための教育プログラムを開発することを目的とした。

## 3. 研究の方法

手話・演劇・舞踊という身体表現と、言語的・非言語的コミュニケーションの関係を探る目的で、各分野の研究者（分担研究者）で学び合い、ワークショップや実験を企画した。たとえばドラマ手法を使ったアクティビティや、ろう者の舞踏家のワークショップ、ダンスセラピーの専門家による身体表現のミラリングの実験や、日本語を介さずに、日本手話を使って学生同士の会話をさせるワークショップ等を行った。さらにパソコン画面上のアニメーション教育エージェントが示す遂行と非言語による理解度表出が学習者に及ぼす影響を調べる実験を行った。

具体的には

- (1) 日本ろう者劇団を招きムーブメントシアターを実施した。
- (2) 聴者による非言語的コミュニケーション

の演劇ワークショップを開いた。

(3) ろう者の舞踏家によるワークショップを開いて、撮影し、多様な参加者のムーブメントを比較し、また視線の測定もおこなった。

ろう者・聴者（日本人・オーストラリア人・ドイツ人）が参加し、そのビデオ録画を分析したりした。

(4) ダンスセラピーの手法を使ってミラリングの実験を行った。

(5) 小中高校の教師を集めた獲得型教育のワークショップを行った。

(6) ろう者と聴者のインテグレーションによる授業のバリアを越える方法としての情報保障の在り方を考え、100%の保障を目指して実施した。

(7) パソコン上で、アニメーションによるエージェントを利用して、その表情や視線をコントロールすることで、そのエージェントの理解度表出の表情・視線が学習者に与える影響（共感や自己効力感）を調べた。

(8) 演劇的手法の教育のワークショップを開催した。

(9) 手話を母語とするろう者の手話教師により、ろう者で手話のできない学生のための、日本語を介さない手話講座を開催した。

上記の分析のために以下のような知見を加えた。

(10) ソーシャルブレインという考え方の認知的研究の成果を調べ、共感の仕組みを考察した。

(11) ミラーニューロンの理論を調べ、特に身体表現のミラリング等の分析に応用した。

これらの理論に基づき、共感性質問紙に加えて、以下の方法を加えた。

(12) HEGバイタルモニターを利用して生体測定を行う。

(13) 唾液アミラーゼ計測器を使ってストレス測定を行う。

(14) アイマークレコーダーで視線を測定する。

これらのワークショップ等において、身体表現に対する自己効力感を測定することを試みた。自己効力感とは、自身が結果を生み出す行動を成功裏に遂行できるか否かに関する確信であり (Bandura, 1977), どのようにひとが自分自身を感じるか、考えるか、動機づけるか、そして振舞うかを決めるとされている (Bandura, 1994)。その有用性は、所与の活動の開始や持続を促し (Sherer, et al., 1982; 1983)、また学業においては、学生の取り組みに対する予測

と説明を可能にするという点で、研究者や教育実践者に注目されている (Bong, 2006)。スポーツなどの身体能力に関する効力感尺度としては、身体性自己効力感尺度 (Ryckman, Robbins, Thornton, & Cantrell, 1982) が多くの研究で参考とされている。本研究では、身体性自己効力感尺度を構成する身体能力と身体表現への効力感の 2 因子を、非言語的身体表現を用いる活動に使用できる表現に改め、そこに演劇教育、ダンスセラピー、手話教育に重要である身体への気づきという観点を加えた 3 因子からなる身体表現活動における自己効力感尺度の作成を試みた。身体能力、身体表現、身体への気づきからなる項目を 8 項目ずつ計 24 項目作成し、身体能力と身体表現に関しては、既存の身体性自己効力感尺度を参考にし (cf. Rackman, et al., 1982)、身体への気づきに関しては、演劇教育及びダンス教育の専門家 2 名と内容的な妥当性を吟味した。

一方共感を脳科学的な視点から解き明かすために、共感とミラーニューロンの関係、身体表現が共感に及ぼす影響、表情や視線が共感に及ぼす影響などに関する最新の研究結果を調べ、脳科学的な実験につなげる。脳科学的実験とは HEG バイタルモニターや、唾液アミラーゼ計測器を利用したストレスや集中の度合いを測るものである。

これらの実験は身体表現と共感の関係、言語的身体表現と非言語的身体表現の差異と類似性を明らかにするために重要であり、その結果を教育に活かすことは障害者・健常者・外国人等の文化的に多様な構成員をもつグループでの相互理解に効果的教育プログラムを作成することに応用できる。

#### 4. 研究成果

項目内容と平均値の分布を吟味し、5 項目を分析から除外することとした。項目分析の結果から計 19 項目を対象に、重み付けのない最小二乗法にもとづく因子分析を行った。分析の結果、スクリープロットから固有値の減衰状況を判断し (第 1 因子から第 6 因子まで、7.82, 2.00, 1.20, 0.88, 0.83, 0.82)、3 因子を採択した。この判断にもとづき、3 因子指定による最小二乗法・プロマックス回

転 ( $k=3$ ) による因子分析が行われた。続いて、因子負荷量 .40 以上を基準にして項目の抽出を行った。その結果、第 1 因子 5 項目、第 2 因子 5 項目、第 3 因子 5 項目の尺度構成が得られた。

各因子の相互相関はいずれも中程度の正の相関を示している。また、信頼性係数として各因子のクロンバックの  $\alpha$  係数を算出したところ、第 1 因子は  $\alpha=8.74$ 、第 2 因子は  $\alpha=8.04$ 、第 3 因子は  $\alpha=8.06$  といずれも高い値を示した。

身体表現に関する自己効力感の概念を記述した 24 項目から因子分析の結果、各 5 項目、3 因子構造が得られた。第 1 因子には、項目 12 「自分の身体の動きを客観的に感じ取ることができる」や項目 8 「自身の身体の動かし方の特徴意識できる」といった身体感覚への気づきを想定した質問項目が集まった。ただし、「身体を器用に動かすことができる」の項目は身体能力を想定したものであった。しかし、この器用さに関する項目も身体感覚に関する一要素として捉えることが可能と考え、第 1 因子を「身体感覚の把握に対する自信」と命名した。第 2 因子に関しては、「初対面のひとを前にしても、普段どおり行動できる」や「緊張していても萎縮せずに動くことができる」といった自身の表現に関する自信を構成する項目が集まったものの、身体感覚への気づきの因子項目を想定した項目 18 「全身を使って気持ちを表現できる」が、この因子を構成する項目として高い負荷量を示した。「全身を使う」という用語によって、身体感覚への気づきとの関係を想定していたが、むしろ「表現できる」という記述に注目が集まったと解釈できる。そのため、 $\alpha$  係数による内的整合性も高いことも考慮し、項目 18 を加えた上で、第 2 因子を「身体表現に対する自信」と命名した。最後の第 3 因子には、長時間の活動や身体の丈夫さや俊敏さに関する項目が集まった。そのため、第 3 因子を「身体能力に対する自信」と命名した。

各因子の  $\alpha$  係数はいずれも .80 以上と高い値を示し、内的整合性という観点から十分に信頼性のある因子からなる尺度を作成したと言える。ただし、第 1 因子と第 3 因子の相関係数がやや高い。2 つの因子において、最

低. 14 以上の因子負荷量の隔たりはあるものの、両因子に負荷量が跨っている項目をみると、質問項目における身体能力を問うための「動き」と身体を把握することを問うための「動き」という文言がうまく区別できない可能性がみとれる。

以上の結果から、演劇教育、ダンス、手話といったような非言語表現を使用する活動に必要とされる3因子を備え、高い内的整合性をもつ身体表現に関する自己効力感尺度のひな形が作成された。今後、各因子の区別をはっきりさせるように文言を改訂した上、基準関連的な妥当性検討を含めたさらなる調査を行う予定である。

これらを踏まえ、「学びへのウォーミングアップ70の技法」(渡部 2011)をはじめとする教育プログラムを構築した。その中でもフリーズ・フレーム、ロールプレイ、ホットシーティング、専門科のマント、ティーチャー・イン・ロール、思考の軌跡を「コア・アクティビティ」とした。また、即興的にしかも自己の身体を感じ取りつつ他者と関わることが強調されるダンス教育プログラムである「ミラリング」「カードを引いて動こう」「新聞紙」とそれに続くシェアリングは、感覚的な多様性・個別性を体験し、相互関係への動機づけを高める上で効果が高い。これらの教育プログラムは、留学生・帰国生・ろう者(手話者)など、文化的に多様な教育機関での教育に有効である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 16 件)

- ① 斉藤くるみ、「大学教育における『日本手話』の意義——リベラルアーツ教育・アイデンティティ教育からキャリア教育へ」、『大学教育学会誌』、(査読有) 63、96-103、(2011)。
- ② 渡部淳、「教育方法としてのドラマ技法」、『授業づくりネットワーク』、(査読無)、307、14-16、(2011)。
- ③ 斉藤くるみ、「脳科学を福祉に活かす—コミュニケーション能力を高める授業を目指して」、『日本社会事業大学研究紀要』(査読無)、57、179-199、(2010)。
- ④ 斉藤くるみ、「英語教育のバリアフリー自習教材の開発」、『日本社会事業大学研究紀要』、(査読無) 55、39-57、(2009)。
- ⑤ 斉藤くるみ、「バリアフリーコミュニケーションを目指す大学生のための英語教育教材」『大学教育学会誌』、(査読有)、59、154-161、(2009)。
- ⑥ 八木ありさ、「即興表現を中心とした大学生のダンスセラピーがセルフ・モニタリングと自己肯定度に与える影響」、『JAPEW 学術研究』(査読有)、25、1-11、(2009)。
- ⑦ 渡部淳、「ドラマ教育の展望」、『児童青少年演劇ジャーナル』(査読無)、36-39、(2009)。
- ⑧ 渡部淳、「教師の資質形成とドラマワーク—J. ニーランズ教授のワークショップを通して」、『教育学雑誌』(査読無) 44、61-97、(2009)。
- ⑨ 渡部淳・正嘉昭、「共同研究—ドラマ教育をめぐる」、『演劇と教育』(査読無) 2009年3月号、4-19、(2009)。
- ⑩ 八木ありさ、「ダンスセラピーにおける感情表現の指導」、『体育の科学』(査読無)、59-2、92-96、(2009)。
- ⑪ Tsukidate, N., “The Effects on the Human-Agent Interaction of Users’ Imagination of Sensations Experienced by the Animated On-Screen Agent”, Educational Study, (査読無) 52, 2009, 89-96.
- ⑫ 渡部淳、「国際理解教育の転換期をどう乗り越えるか—教師の資質形成を素材として考える」、『国際理解教育』(査読無) 13、135-140、日本国際理解教育学会、135-140、(2008)。
- ⑬ 八木ありさ、「ドイツにおけるダンス・セラピスト養成の現状」、『ダンス・セラピー研究』(査読無) vol. 4, 12-24、(2008)。
- ⑭ 八木ありさ、「ダンスセラピスト養成の学習課題を導入した援助技術演習指導に関する研究」、(社) 日本女子体育連盟『学術研究』、(査読無) 第 24 巻、67-78、(2008)。
- ⑮ Yagi, Arisa, “Improvisational Body Expression and Its Function in Dance Therapy “, *Journal of Social Policy and*

*Social Work*, (査読無) No. 12, 15-32, (2008).

- ⑩ 梶館尚武、「身体化エージェントの身体方向・登場位置がユーザーに与える影響」『知能と情報』(査読無) 20、77-89、(2008)。

[学会発表] (計 10 件)

- ① 渡部淳、「演劇的知と授業研究の現在」、獲得型教育研究会、2012年3月27日、日本大学文理学部百周年記念館。
- ② 梶館尚武、「マルチメディア学習におけるナレーションと字幕の言語の組み合わせが保持・転移課題成績に及ぼす影響—外国語ナレーションにおける冗長性効果の検討」、日本教育工学会第27回大会2011年9月17-19日。
- ③ 小松由樹子・武井友希・田坂麻紘・梶館尚武、「青年期の愛着スタイルと恋愛へのロマンチック希求度の関係」、発達心理学会第22回大会(ポスター発表)2011年3月25-27日。
- ④ 渡部淳、「参加型アクティビティの定着と教育コミュニケーションの未来」獲得型教育研究会2011年3月26日、日本大学文理学部百周年記念館。
- ⑤ 渡部淳、「教師の専門性とアクティビティ運用能力」、獲得型教育研究会、2010年3月27日、日本大学文理学部百周年記念館。
- ⑥ Tsukidate, N., Consideration of the redundancy Principle in Foreign Language Narration, The 4<sup>th</sup> International Conference on Cognitive Load Theory 2010 The Hong Kong Institute of Education, Nov. 22.
- ⑦ 梶館尚武、「アニメーション教育エージェントが示す遂行と非言語による理解度表出が学習者の自己効力感におよぼす影響」日本教育工学学会、金城学院大学、2010年9月18日
- ⑧ 渡部淳、「教育方法のトポロジー(2)ードラマワークを活用した教師研修の可能性」、香川大学、日本教育方法学会、2009年9月27日。
- ⑨ 渡部淳、「教育方法のトポロジーードラマワークを活用した文学教材の開発」、愛知教育大学、日本教育方法学会、2008年10

月2日。

- ⑩ 渡部淳、「学びのためのウォーミングアップ」沖縄ドラマ教育研究会2008年4月26日。

[図書] (計 4 件)

- ① 渡部淳・獲得型教育研究会編、旬報社、『学びをかえるドラマの手法』、(2010)、221頁。
- ② 渡部淳・日本国際理解教育学会編、旬報社、『グローバル時代の国際理解教育』、(2010)、17-25。
- ③ 齊藤くるみ、世界思想社、「視覚言語の交差点～国際手話」、木村護郎クリストフ・渡辺克義編『媒介言語を学ぶ人のために』、(2009)、104-122。
- ④ 渡部淳、J・ニーランズ、『教育方法としてのドラマ』、晩成書房、(2009)、172頁。

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

齊藤 くるみ (Saito, Kurumi)  
日本社会事業大学・社会福祉学部・教授  
研究者番号：30225700

(2)研究分担者

渡部 淳 (Watanabe, Jun)  
日本大学・文理学部・教授  
研究者番号：80366541

八木 ありさ (Yagi, Arisa)  
日本社会事業大学・社会福祉学部・教授  
研究者番号：80249648  
(H20：連携研究者)

関 啓子 (Seki, Keiko)  
神戸大学・医学部・教授  
研究者番号：90154640  
(H20→H21)

槻館 尚武 (Tsukidate, Naotake)  
国際基督教大学・教育研究所・研究員  
研究者番号：80512475  
(H23：連携研究者)

(3)連携研究者